ＩＳＳＮ　0919-0783

若狭歴民だより　第３号
１９９３年７月

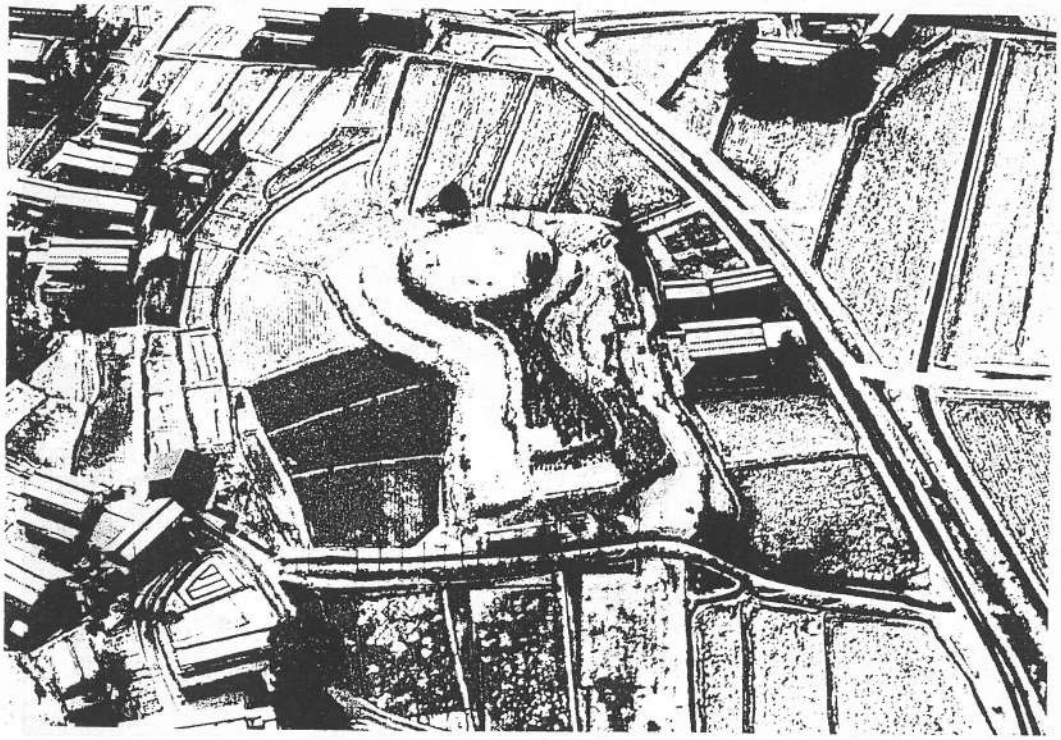
上之塚古墳発掘調査概報

福井県立若狭歴史民俗資料館

１．はじめに

上之塚古墳は，福井県遠敷郡上中町脇袋に所在する（第３図１）。福井県教育委員会は，５箇年継続の国庫補助事業である「若狭地方の主要前方後円墳総合調査」の平成４年度分として当古墳の発掘調査を計画し，福井県立若狭歴史民俗資料館がこれを担当，翌平成５（1993）年３月に実施した。

上之塚古墳は，早く昭和10（1935）年に，西塚・中塚・上船塚・下船塚の上中町内の他の主要古墳とともに，国の史跡に指定された。ただ，大部分の古墳がそうであるが，上之塚古墳も指定範囲は墳丘のみであり，それと本来一体をなすべき周濠については含まれていない。そこで，当然保護の対象とされるべき周濠の範囲を確定するため，トレンチによる確認調査を計画



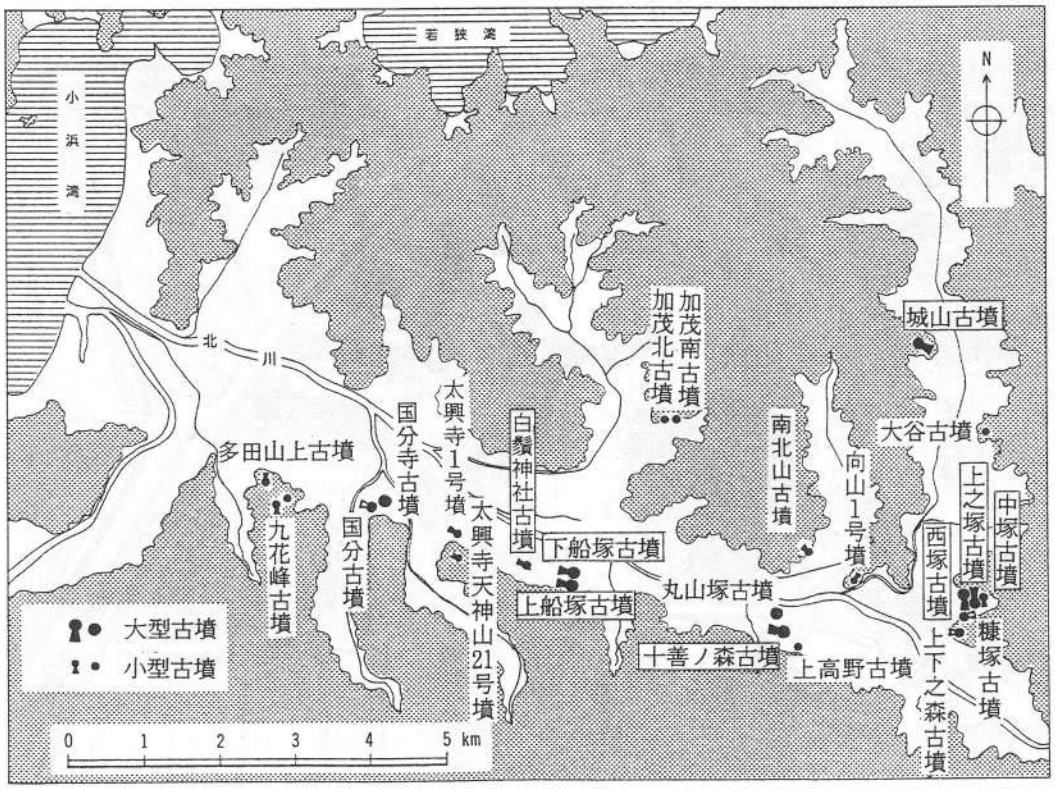
第１図　北方上空より見た上之塚古墳

したものである。

さて，若狭における主要古墳の網羅的な報告は，大正年間の上田三平の調査をもって嚆矢となす。その中で上田は，上之塚古墳については周濠をそなえる全長約45間（81m）の３段築成の前方後円墳で，葺石・埴輪の有無は不明と記述している〔上田1920〕。

その後斎藤優は，昭和30年前後から同40年代にかけて，十善ノ森（じゅうぜんのもり）・丸山塚（まるやまづか）・西塚（周濠部分）の各古墳を発掘した。そうして，北川流域における盟主墳は，中期にはまず２系列から形成が開始され，脇袋古墳群を中心とする群では上之塚→中塚→西塚の各古墳が，船塚古墳群を中心とする群では下船塚→白鬚神社（しらひげじんじゃ）→上船塚の各古墳が順次築造され，やがて後期には天徳寺古墳群の１系列に統合され，十善ノ森→丸山塚→上高野の各古墳が継起的に築造された，とその変遷を推論した〔斎藤1970〕。そのうち上之塚古墳については，周濠をそなえる全長約80mの３段築成の前方後円墳で，葺石・埴輪の有無は不明と言及している。ただ，西塚古墳が埴輪をもつので当古墳にも存在するのではないか，と付記するのを忘れていない。

ところが，上中町城山古墳で埴輪を採集した古川登は，昭和55（1980）年に，埴輪が川西宏幸編年（以下同編年による）のⅡ～Ⅲ期に相当するので，同古墳は上之塚古墳等に先行する若狭の初代の大首長墓であると特定した。そうして，主要古墳が２系列で営造されたとみる斎藤の説を継承しながら，脇袋古墳群を中心とする群では城山→中塚→上之塚→西塚と５世紀代に



第２図　北川流域における主要古墳分布図（縮尺1/100,000 枠内は５箇年調査対象古墳）

推移したとみる新たな案を提起した。なお，上之塚古墳については，全長約90mの前方後円墳で，葺石をそなえ，埴輪もそなえるものかと言及している〔古川1980〕。

さらに，その後城山古墳で埴輪の資料を追加・採集した古川は，盟主墳の変遷の骨子には改変の必要はないが，城山古墳の埴輪の時期をそれまでのⅡ～Ⅲ期からⅣ期に訂正した〔古川1987〕。すなわち，若狭の大首長墓の築造は，５世紀中葉に開始されたと修正したわけである。

いずれにしても，以後上中町を中心に分布する盟主墳の編年は，おおむね古川説に準拠することとなった〔入江1985・石部1987①・福井県1991・入江1992〕，といっても過言ではあるまい。もっとも，上之塚古墳の埴輪で公表されたものは存在しない。

ところで，平成元（1989）年に，上之塚古墳付近で埴輪ではないかと推測しうる須恵質の小断片が採集された。これは，既存の上之塚古墳の築造時期の推定を補強する新資料の出現にほかならぬものであった。

けれども，これまで上之塚古墳が３段築成と称されてきたことに関しては，別に疑問が生じた。なぜなら，畿内を除く各地方において，３段築成の古墳はきわめて稀な例に属する。同古墳の外形観察によれば，墳丘西部に顕著な３～４段の築成は畑や宅地化のための後世の改変によるもので，後円南部や前方東部のみが本来の原形をとどめているとみなすのが穏当であろうと考定しえた。そうして，上中町内の他の盟主墳が２段築成である実状をも参考に，同古墳も２段築成であろうとみなすに至った〔中司1990〕。

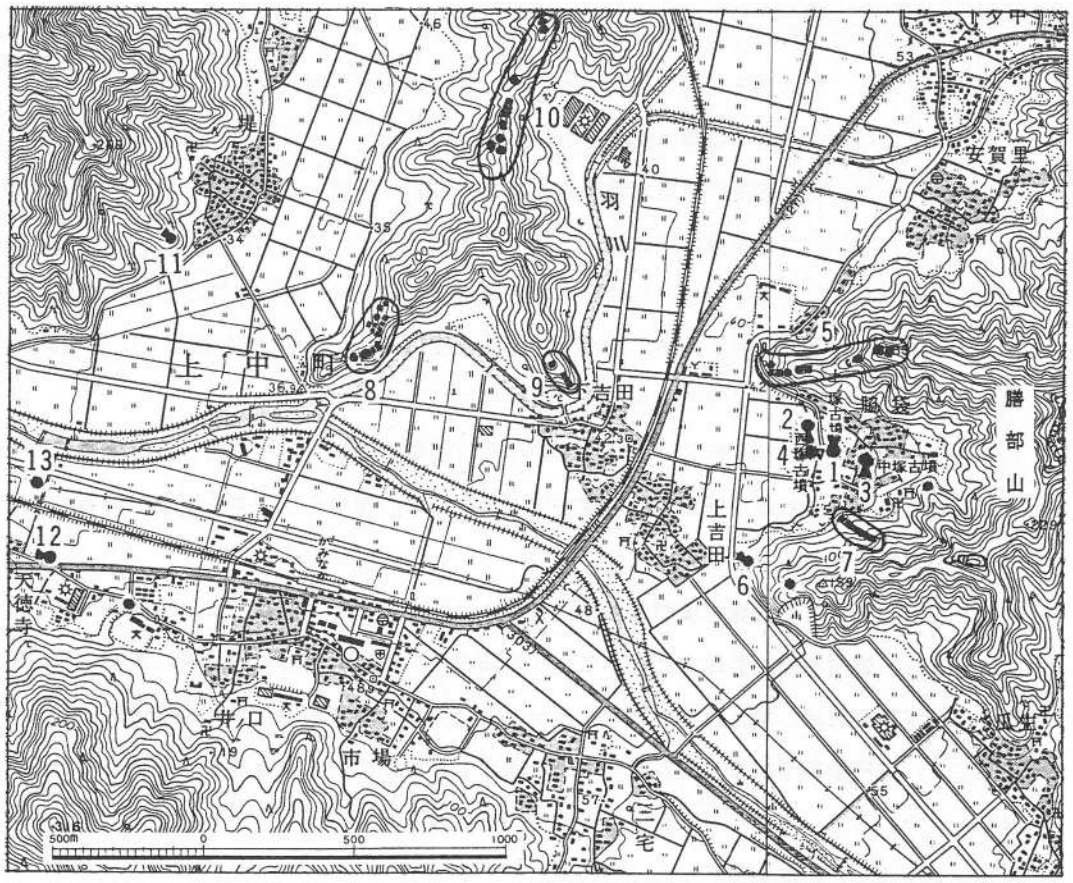
ちなみに，今日まで北陸において確実な３段築成の古墳の存在は判明しておらず，唯一石川県鹿島郡鹿西町雨ノ宮２号墳のみがその可能性を有する②。しかし，これとても昨年新たに作成された同古墳の測量図や，西接する雨ノ宮１号墳の発掘調査の結果〔鹿西町1993〕から類推すると，最下段は基台部③である可能性が残る。

それはともかく，従来５世紀の築造とみなされてきた下船塚古墳では，若狭で最も後出の様相を呈する埴輪が採集された。そこで中司は，時期比定の根拠の希薄な中塚・上之塚両古墳を除き，既存の編年案のように若狭の大首長墓が２系列で形成されたものではなく，城山…→西塚→十善ノ森→上船塚→下船塚と，１系列で変遷したものと推定した〔中司1990〕。

いずれにしても，若狭の主要古墳の中で上之塚古墳は，中塚古墳とともにではあるが，なお詳細な時期を確定するための資料が決して十分ではない数少ない盟主墳であった。今次調査は，規模の確定にとどまらず，推定時期の明確化をも目したものである。

２．周辺の古墳

上之塚古墳に西接する大字脇袋小字野口には，５世紀後葉の南面する大型前方後円墳の西塚古墳（第３図２）が所在する。墳丘は，大正５（1916）年の土採りで大幅な損壊を被っており，後円部と前方部が部分的に遺存するに過ぎない。「若狭地方の主要前方後円墳総合調査」の昨



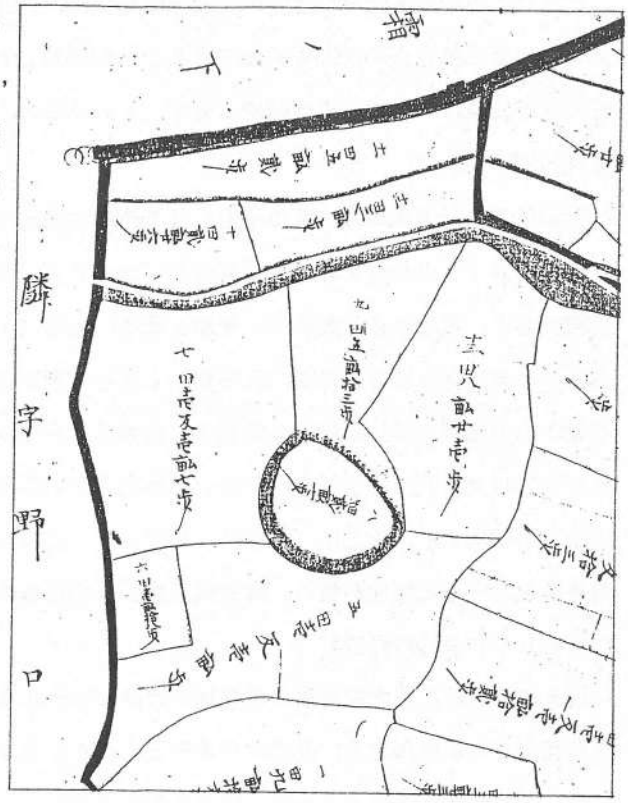
第３図　周辺の主要古墳分布図（縮尺 1/25,000　国土地理院「熊川」・「遠敷」図幅分載）

年度の調査対象として，周濠の範囲確認調査を実施した。発掘で全長約74mを測り，周濠や葺石・埴輪(Ⅳ期）をそなえることは判明したが，段築数は２ないしは３段と推定しうるだけで，依然未解決の課題といわざるをえない。土採り時に石室（横穴式）から金垂飾付耳飾，鈴・礪佩付金銅帯金具，銀鈴，眉庇付冑，短甲などの豊富な副葬品が出土している〔斎藤1970・中司1986〕。わけても，多くの地元産かと推測しうる埴輪に，吉備の地方色を有し〔川西1978〕，胎土や異なる色調からみても吉備産かと推測しうる若干の埴輪が混在する事実，副葬品に金垂飾付耳飾や鈴・礪佩付金銅帯金具などの舶載品が混在する事実，脇袋に東接する山が膳部山と呼ばれている事実，『先代旧事本紀　巻十』では膳臣の祖を若狭国造に定めたことが記載されている事実などが，『日本書紀』雄略８(464）年条の膳臣斑鳩が吉備臣小梨らとともに新羅救援に赴いたとする記載と，まさに符合することは注目に値する〔中司1986〕。

東接する大字脇袋小字矢ノ山には，５世紀代と推測され，南面する現存長約53mの前方後円墳の中塚古墳（同図３）が所在する。集落内のため墳丘外縁部の掘削・改変が激しいが，周濠と段築・葺石・埴輪（Ⅳ期）をそなえる。南西接する大字脇袋小字塚廻には，今日径約25mの円墳状を呈する糠塚古墳（同図４）が所在する。その位置や大きさから西塚古墳の陪塚説があ

る。けれども，地籍図上には東接するあたかも前方部状の地割りが認められ，かつ若狭では類例の乏しい埴輪（時期未詳）もそなえるので，小型前方後円墳の可能性も否定しがたい（第４図）。

上之塚古墳の南西方で，膳部山から派生する丘陵の先端部には，５世紀の西面する小型の帆立貝形前方後円墳ではないかと推測される上下之森古墳（旧称 脇袋丸山古墳，同図６）が所在する。鏡や刀剣多数の出土の伝承を有する〔上田1920〕。前方後円墳ならば後円南部に相当する箇所が削平されていることになる。略測長約57mを測り，２段築成で葺石・埴輪(Ⅳ期)をそなえる〔福井県1992〕。



第４図　糠塚古墳周辺の字図(図の左方が北)

また，本年，膳部山から北西方にのびる丘陵上（同図５）や，南西方にのびる丘陵からさらに北西方に派生する小支脈上（同図７）などに，合計20基余りの小型の方墳（あるいは弥生時代の方形台状墓か。以下同）や円墳の所在を確認しえた。

一方，ＪＲ上中駅北方の丘陵上には13基前後からなる向山古墳群（同図８）が所在しており，前方後円墳・方墳・円墳が混在する。なかでも，向山１号墳は昭和62・63（1987・88）年に発掘され，５世紀中葉の北東面する全長約49mの小型前方後円墳であることが判明した。墳丘は２段築成で，葺石・埴輪（Ⅳ期）をそなえる。埋葬設備は，後円頂部に位置し前方部方向に開く横穴式石室１基のほか，前方上部にも武器・武具の埋納土壙１基が存在する。内行花文鏡・金垂飾付耳飾・鉄刀・鉄槍・短甲・鉄隅金具付革楯など，小型前方後円墳ながら顕著な品が出土している。横穴式石室が北部九州系であり，副葬品に金垂飾付耳飾・三輪玉形ガラス玉などの舶載品が混在する事実は，見逃しがたい〔上中町1988・中司1993〕。その東方の丘陵先端頂部（同図９）や，同丘陵の北方頂部（同図10）にも小型の円墳や方墳など合計15基余りの古墳の所在が確認されている。

なお，これまで述べきたった丘陵上の小型の円墳や方墳は，いずれも時期を特定する明確な根拠を欠いているが，立地や分布状況・墳形などの諸特徴から，古墳時代でも前半期的な様相を有する。

さらに，谷を挟んだその西方の丘陵先端部には，昨平成４（1992）年，北西面する略測長約30mの小型の帆立貝形前方後円墳であることが判明した南北山古墳（同図11）が所在する。墳丘の外部設備は外形観察では確認しえず，くわうるに，時期を考定する明確な根拠を欠いている〔福井県1992〕。

その南方の北川南岸の山麓の平地には天徳寺古墳群が所在する。国道27号に北接する大字天徳寺小字森ノ下の十善ノ森古墳（同図12）は，６世紀初頭の西面する全長約67mの大型前方後円墳である。墳丘は２段築成で，周濠と葺石・埴輪（Ｖ期）をそなえる。昭和29(1954)年に発掘され，後円部と前方部に横穴式石室各１基を内蔵することが判明している。後円部の横穴式石室から中国製方格規矩鏡・金銅冠帽・金銅馬具・環鈴など多数が出土している〔斎藤1970〕。その北方の大字天徳寺小字丸山には，６世紀中葉の径約50mの大型円墳である丸山塚古墳（同図13）が所在する。墳丘は，昭和32（1957）年の土採りで消滅したが，２段築成であり，かつ周濠をそなえる可能性が強い。横穴式石室から同型鏡の多い画文帯神獣 鏡・金銅馬具など多数が出土している〔斎藤1970〕。

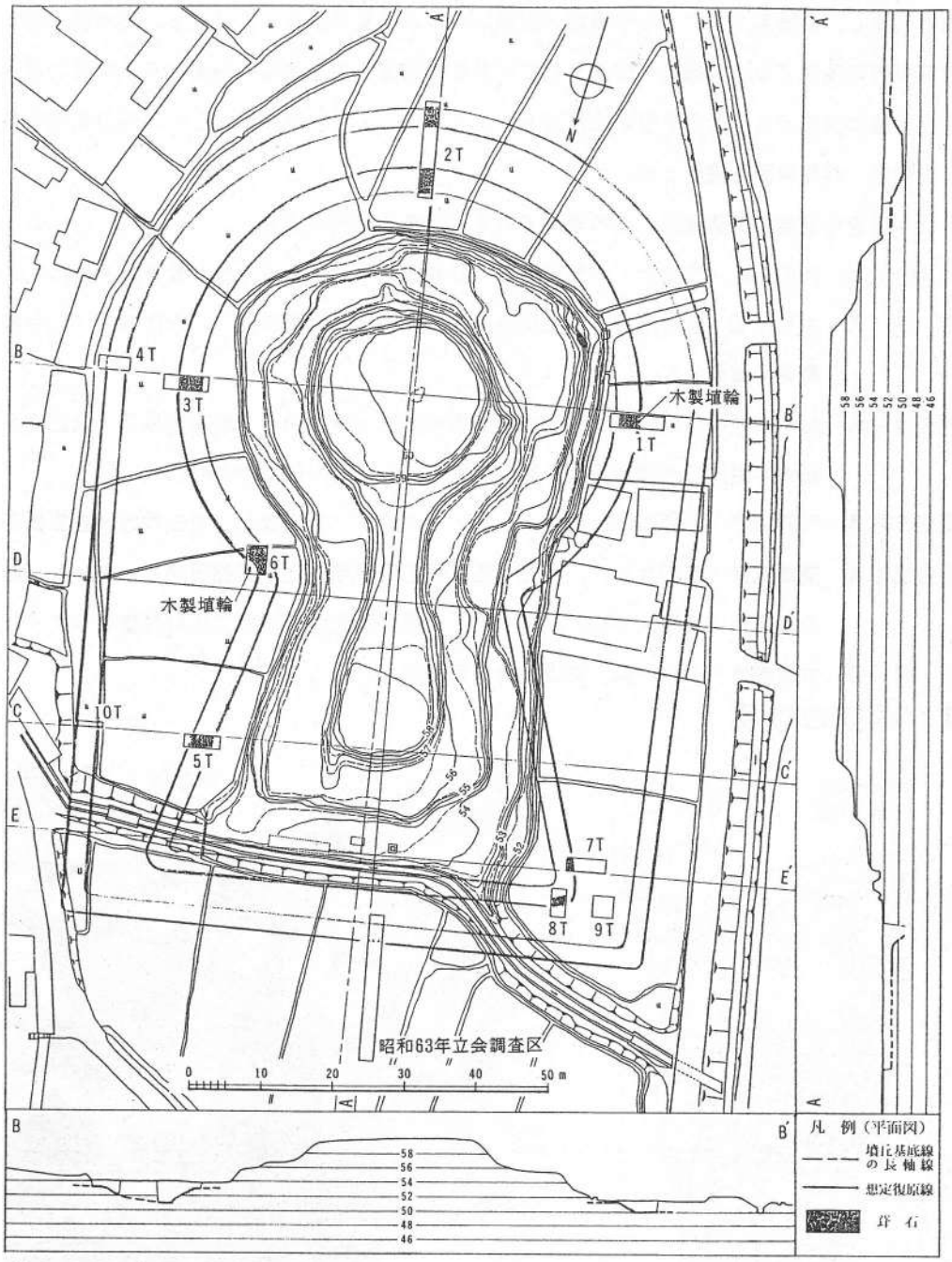
以上のように，上之塚古墳の所在地の近隣には大小多数の古墳が分布している。また，若狭を東西に貫く若狭街道と，近江の今津町と小浜市を結ぶ九里半街道が合流している。そうした点で，この地区は若狭の中央部に位置するだけでなく，交通の要衝に相当する。さらに，北川南岸には三宅の地名も存在する。上之塚古墳は，まさにそうした特異な環境に位置する，しかも若狭最大の古墳である。

３．調査の経過

今回の調査にあたっては，まず既往の墳丘測量図〔福井県1986〕を基準に，地表で観察しうる墳丘の長軸線（Ａ－Ａ′），ならびにその長軸線と後円部の中心点で直交する線（Ｂ－Ｂ′），前方頂部先端で直交する線（Ｃ－Ｃ′），くびれ部で直交する線（Ｄ－Ｄ′），前方部先端で直交する線（Ｅ－Ｅ′）をトランシットを用いてそれぞれ設定し，各線上の要所に発掘箇所を測量するための杭を設置した。その後，各線の近辺に順次合計10箇所のトレンチを設け，それらはおおむね発掘順にしたがってトレンチ番号をつけ，呼び分けた（第５図）。

後円部では，その西方で墳丘の基底線の検出を予測しうる箇所に第１トレンチを設定。その結果，ほぼ所期の通りの成果を得た。次に，後円部の南方に第２トレンチを設定，墳丘の基底線にとどまらず周濠外周部分をも検出しえた。以上の結果をもとに，後円部東方では墳丘基底線と周濠外周部分に相当する２箇所に分割して，それぞれ第３・第４トレンチを設定。

さらに，前方部の東方に第５トレンチを設定。また，後円部・前方部の基底線の想定接合部にあたるくびれ部の東方に第６トレンチを設定。その後，前方部北端は現在排水路や土手の存在により基底線の確認が不可能なため，前方部の北西方で前方部北東隅と地表で観察しうる墳



第５図　上之塚古墳調査区位置図（縮尺 1/1,000 『福井県史』（資料編13）掲載図より作成）

丘の長軸線を挟んで対称的な位置に，北西隅確認のための第９トレンチを設定。しかし，この箇所では北西隅の基底部を検出しえず，墳形は地表で観察しうる墳丘の長軸線を挟んで東西が対称的ではないことが判明した。そこで第９トレンチの南東方に第７トレンチを，東方に第８トレンチをそれぞれ設定。

こうした調査で最小限の墳形確認は終了したが，期限や予算上の制約からそれ以上の発掘は

困難と判断し，以後各トレンチの平面図・断面図の作成に着手した。それでも，埋め戻し時に，前方部東方の現在ブロック擁壁が建造されているため周濠外周上端線の検出こそ不可能であるが，上端線に西接すると思える箇所に第10トレンチを設定。この箇所のみごく小型の重機を使用して掘削，外周斜面を確認した。

今回の調査の直接の関係者は，次の通りである（肩書は当時のまま）。

調査指導　河原純之（文化庁）・和田晴吾（立命館大学）・網谷克彦（敦賀女子短大）

調　査　員　中司照世・畠中清隆（以上福井県立若狭歴史民俗資料館），永江寿夫（上中町教育委員会）

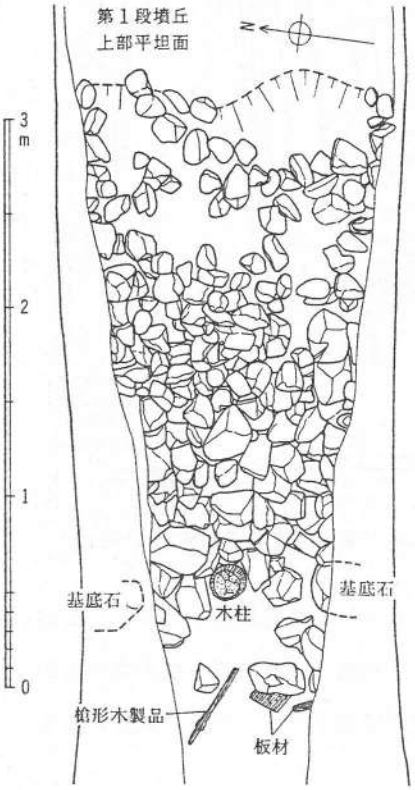
調査補助員　岩木智枝・垣根美奈・村松佳幸・田畑直彦・長友朋子・國重佐夜子（以上立命館大学生），魚津知克（京都大学生），青木元邦（奈良大学生）

調査作業員　竹原善市・中塚政雄・中塚よしゑ・中村りゑ・谷田茂七・吉田竹雄・吉田良子

調査協力者　高橋克壽（京都大学），河野一隆（京都府埋蔵文化財調査研究センター），白波瀬克則（京都大学生），鈴木篤英（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

地　権　者　竹原善市・中村一雄・的場　茂・吉田茂二

4．調査の概要

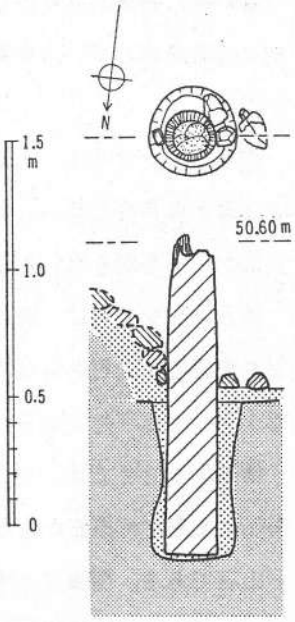


第６図　第１トレンチ検出遺構
実測図（縮尺 1/40）

第７図　西方より見た第１トレンチ木柱出土状態

既述のように，発掘調査は地表で観察しうる墳丘の外周に計10箇所のトレンチを設けて実施した。

第１トレンチでは，後円部の最下段である第１段墳丘の上部平坦面・斜面，ならびに周濠を検出。墳丘斜面は河原石や山石からなる葺石で葺いている。河原石は主に上縁部や下縁部に，山石は主にその中間部に施している。周濠底は現地表下約1.6mに位置する。ごく少量の埴輪片が出土したほか，トレンチ内検出の葺石の基底石の中間で，樹立された状態のいわゆる木製埴輪の支柱と思える木柱（以下「木柱」と表記）を検出。また，周濠底で槍形木製品・板材等も出土（第６図）。



第８図　葺石除去後の第１トレンチ木柱出土状態実測図（縮尺1/30）

第２トレンチでは，後円部の第１段墳丘の上部平坦面・斜面，ならびに周濠のほか，周濠外周部分の上部平坦面・斜面も検出。墳丘斜面や周濠外周斜面は河原石や山石からなる葺石で葺いている。河原石と山石の用い方の差は第１トレンチと同様である。周濠底は現地表下約2.5mに位置する。ごく少量の埴輪片と多数の中世土師質小皿・陶器・板材の各破片が出土。中世の遺物が周濠の内外両斜面の上部葺石間に混入しているので，周濠の埋没は比較的緩慢なものであって，中世まで葺石の上部は露出していたことを推察しうる。

第９図　南方より見た後円部と第２トレンチ

第３トレンチでは，後円部の第１段墳丘の上部平坦面・斜面，ならびに周濠を検出。墳丘斜面を河原石や山石からなる葺石で葺いていることや，河原石と山石の用い方の差は第１トレンチと同様である。注目すべきことは，周濠底が葺石の基底石より低くなって

いるので，基底石に外接して細長い石をあたかも杭状に立て並べ，基底石の周濠内への崩落を防ぐ措置を施している事実である。周濠底は現地表下約2.5mに位置する。ごく少量の埴輪片が出土。

第４トレンチでは，周濠外周部分の上部平坦面・斜面を検出。第２トレンチとは異なり，斜面に葺石は存在しない。ただ，トレンチ西端部では若干の河原石の散在をみたので，はたして斜面が地山を削り出したままであるか否かは速断しがたい。埴輪片１個のみが出土。

第５トレンチでは，前方部の第１段墳丘の上部平坦面・斜面，ならびに周濠を検出。墳丘斜面を河原石や山石からなる葺石で葺いているが，河原石と山石の用い方の差は，葺石の遺存状態が悪いため不明である。周濠底は現地表下約2.6mに位置する。ごく少量の埴輪片が出土。

第６トレンチでは，くびれ部の墳丘最下段の上部平坦面・斜面，ならびに周濠を検出。墳丘斜面は山石や河原石からなる葺石で葺いているが，河原石はごく一部混在するのみで，ほとんど山石である。周濠底は現地表下約2.2mに位置する。比較的多くの埴輪片のほか，埋土下部のピート層内に木柱が横転した状態で出土。

第７トレンチでは，前方部の第１段墳丘の斜面，ならびに周濠を検出。墳丘斜面は下縁部のみの検出であって，ほとんど河原石で葺いている。周濠底は現地表下約１ｍに位置する。埴輪片の出土をみていない。

第８トレンチでは，前方部の第１段墳丘の斜面，ならびに周濠を検出。上部平坦面は未確定。墳丘斜面を河原石や山石からなる葺石で葺いていることや，河原石と山石の用い方の差は第１トレンチと同様である。周濠底は現地表下約１ｍに位置する。ごく少量の埴輪片が出土。

第９トレンチでは周濠底を検出。埴輪片の出土をみていない。

第10トレンチでは，周濠外周部分の斜面を確認。斜面に葺石は存在しない。ただ，埋土中に若干の河原石の包含をみたので，斜面が地山を削り出したままであるか否かは速断しがたい。埴輪片の出土をみていない。

５．出土遺物

出土品には，土製埴輪では円筒形・朝顔形と家形の各破片若干が存在し，また，木製品では木柱・槍形木製品・板材等若干が存在する。そのほかにも，須恵器，中世の土師質土器・陶磁器・板材等の各破片若干が混在する。

以下，古墳時代の主要遺物についてのみ説明する。

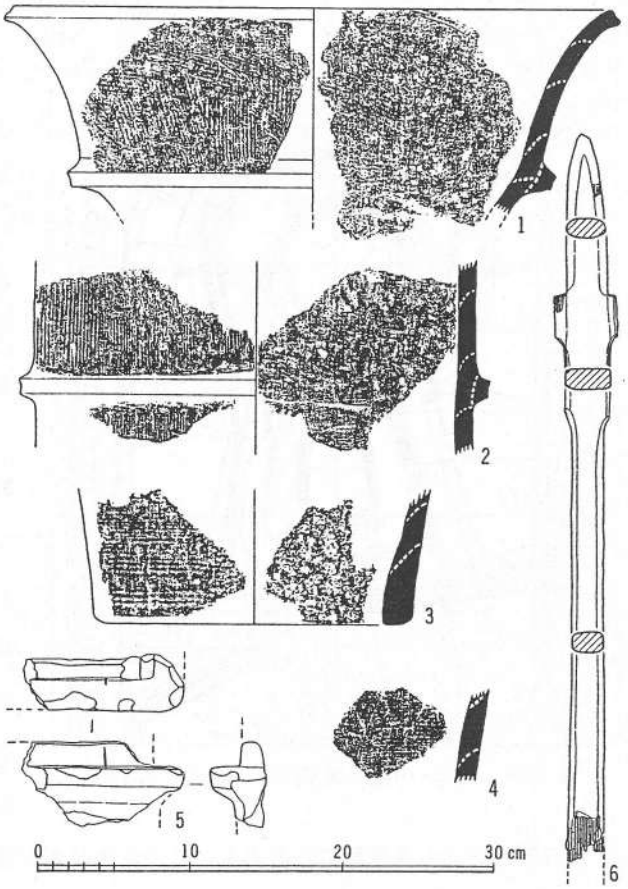
円筒形埴輪（第10図２～４）　いずれも小破片であり，第７・第９・第10を除く各トレンチで出土。大部分の破片は外面がタテハケ調整のみであるが(２)，ごく一部にはＢ種ヨコハケ調整が施されている（３・４）。いずれも野焼き焼成と判別しうる品で，一部は黒斑を有する。

朝顔形埴輪（第10図１）　比較的大型の２個は第３（１）・第５両トレンチ出土。内・外面

はタテないしはナナメのハケ調整が施されている。ともに野焼き焼成と判別しうる破片であって，黒斑を有する。

家形埴輪（第10図５）　１個のみで，第４トレンチ出土。基部かと思える。

木　　柱　２本を検出。木柱１は第１トレンチ出土（第６～８図）。上部が腐朽しており，現存長133cm，直径19cmを測る。径40cm以上の樹木を４分割前後に断ち割り，その後外周側面を多角柱状にチョウナで縦に削って，ほとんど円柱に近く仕上げた品である。下部側面に顕著な切削痕が残る。木柱２は第６トレンチ出土。両端が腐朽しており，現存長188cmを測る。縦に割れていて，遺存部分の方が少ないため正確を期しがたいが，直径15cm以上を測る。木柱１より腐朽が激しく，側面の切削痕は確認しえない。



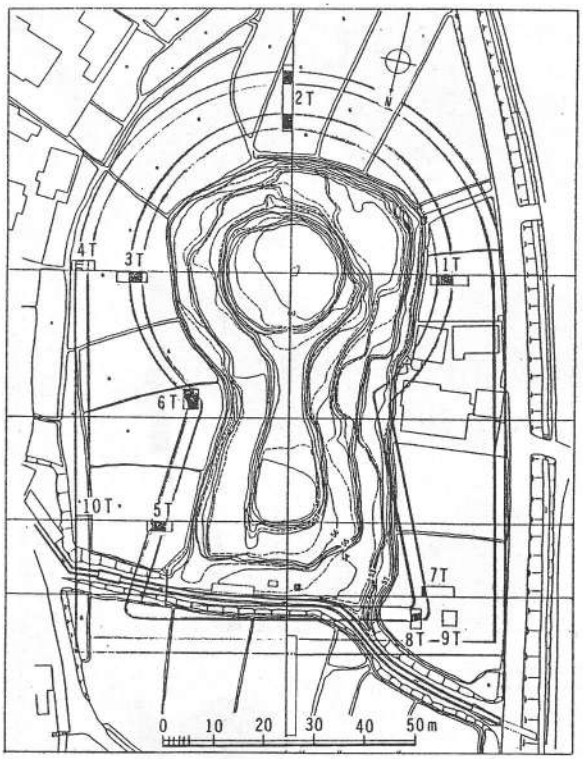
第10図　円筒形埴輪（２～４），朝顔形埴輪（１），家形埴輪（５），槍形木製品（６）実測図（縮尺$^{1}/_{5}$）

槍形木製品（第10図６）　１本のみで，第１トレンチ出土（第６図）。槍先部から柄部まで一木で削り出した品である。柄部の半ばで毀損しており，基端部を欠失する。現存長48cm，最大幅4.1cm，同厚さ1.5cmを測る。

６．まとめ

今回の発掘では，水田下に埋没していた墳丘の最下段部である第１段と周濠を検出しえた。現時点で墳丘や周濠の全形を推定するには，なお調査箇所が十分ではないため多少の懸念が残らざるをえない。それでも，今次調査の結果と昭和63（1988）年の圃場整備事業に先立つ立ち会い調査によって確認された，前方部北方の周濠外周上端線の位置から，ほぼ復原は可能である。復原にあたっては主に次の２案を考えうる。

まず，今回確認しえた後円部・前方部両部分の墳丘基底線を２分割する長軸線（南北方向の一点鎖線）で，東西を対称的な形で復原するＡ案である（第５図）。この案では周濠外周の上・下両端線も長軸線を挟んで対称形に復原した。こうした場合，周濠外周の上端線は後円部西方



第11図　墳丘・周濠B案復原図(縮尺1/1,500)

では現道路に内接するが，前方部西方では道路から離れることとなり，かつ，墳丘基底線の長軸線は地表で観察しうる墳丘の長軸線（A-A′）とは，ずれることになる。なお，前方部北端の各段斜面の等高線は，地表で観察しうる墳丘の長軸線とは直交せず，墳丘基底線の長軸線と直交する。この点はA案が説得力をもつ。

他の案は，地表で観察しうる墳丘の長軸線を挟んで東西両部分が対称形をなさない形に復原するB案である（第11図）。この場合，前方部北端の各段斜面の等高線は，地表で観察しうる墳丘の長軸線と斜交することになる。ただし，周濠東外周の上・下両端線を長軸線を挟んで対称形に復原すると，後円部西方にとどまらず前方部西方でも現道路に内接する。この点はB案が説得力をもつ。

なお，A案で，前方部西方の周濠外周の上端線も現道路に内接する形の，墳丘東西の両周濠幅が異なる復原案をも考えうる。

ともあれ，今回の発掘調査の結果をもとに，測量図から墳丘各部分の規模を算出すれば，推定復原長約100m，後円部径約64m，同高約10m，前方部推定復原長約36m，同幅約60m，同高約8.5m，墳丘両部分の比高差約1.6mになる。墳丘の外周には，下端幅約6～8m，深さ約1.6mの周濠が全周するものとみなせる。周濠を含めた全体の推定復原長は約117m，同幅は約84mとなる。

地表で観察しうる墳丘は，その大部分が史跡指定範囲であり，トレンチによる切断や確認調査などを実施していない。よって，未だ確定しえたわけではないけれども，今回の調査結果と周辺の地形観察による所見とを総合すれば，墳丘が3段築成であることはまず疑いない。だとすれば，北陸で3段築成であることが確定した古墳としては，目下唯一の例である。北陸には当古墳よりはるかに大型の古墳がありながら，それらはいずれも2段築成に過ぎない。当古墳のみが畿内の天皇陵を中心とする大型古墳と同様に3段築成であり，今後も北陸での追加例の増加は可能性がきわめて少ないと考えられるのであるから，その意味するところは大きいといわざるをえない。

墳丘は，第１段のみが周囲の地山を掘削することによって形成された，いわゆる地山削り出しによるものであり，第２・第３段が盛土による築成と推察しうる。第１段墳丘は，高さが約1.3～1.4mに過ぎないのであるから，大半は盛土によって築成されていることになる。

葺石は，畿内の主要古墳以外では類例の乏しい，周濠外周斜面にも配置したものである。④ 既述のように，主に斜面の上縁部と下縁部には河原石を，その中間部には山石を，それぞれ用いている。河原石は堅固であるのに対して，山石はたとえば実測作業中の歩行で比較的簡単に割れる程度の脆弱なものでなので，強度の必要な上・下縁部には前者を，その必要性の弱い中間部には後者をというように，双方を適宜使い分けたものであろうか。河原石は，当古墳の南西方１キロ弱の上吉田近辺の北川から採取し，山石は近隣の丘陵から採取したものと推察しうる。すなわち，２種類の石の併用は，必要な石材の量と運搬距離に係わる，労働力の制約上の問題から生じた結果かもしれない。周濠外周斜面における葺石の配置が，一部にとどまるらしいこともこうした想定を補強する。なお，幅の狭いトレンチによる調査であったためか，葺石施工作業の単位である区画石の配置は確認しえなかった。

埴輪には土製と木製が混在している。土製埴輪の出土量は，破片数の集計や他の古墳との厳密な対比を実施したわけではないが，一般のこの種の古墳の調査と比較してきわめて少ない。⑤ あたかも木製埴輪がそれを補完するかの感すらある。木製埴輪は近年畿内を中心に発見例が増加しつつあるが，当古墳の例は北陸では本県遠敷郡上中町日笠松塚古墳や，同三方郡美浜町帝釈寺４号墳に次いで３例目に該当する〔福井県1993〕。帝釈寺４号墳では柱跡の並列を確認しえたのみであるが，日笠松塚古墳では周溝内に約４ｍ間隔で樹立状態の木柱が遺存していた〔上中町1991〕。話を土製埴輪に戻すと，黒斑の点在や色調からいずれも野焼き焼成の品と思え，また，一部にＢ種ヨコハケ調整痕を有する品が混在する。したがって，これらの埴輪は，川西編年〔川西1978〕のⅢ期に相当する。

そうであれば，城山古墳・西塚古墳など，これまで若狭においてはⅣ期以降の埴輪をそなえる古墳の存在しか判明していなかったわけであるから〔中司1992〕，上之塚古墳は当地の盟主墳の中では最も先行する可能性が生じる。そこで，改めて従来最も先行する盟主墳とみなされてきた城山古墳の墳形〔福井県1986〕と比較すると，上之塚古墳の前方部幅は後円部径より小さいのに対して，城山古墳の前方部幅は後円部径より大きい。かつ，両部分の比高差は上之塚古墳の方が城山古墳より大きい。ゆえに，双方出土の埴輪の編年観とも併せて考定すれば，上之塚古墳は城山古墳より先行する可能性が強い。

ところで，隣接する越前における埴輪編年のⅢ・Ⅳ期の移行期は，須恵器の陶邑編年〔田辺1966〕のＴＫ216型式期に位置することが判明している。しかし，当若狭においては向山１号墳の調査で，ＯＮ46型式期がⅣ期の一端に位置することが判明しているのみで，越前と同様な時

期的推移を辿るか否かは，未だ解明に十分なだけの資料が揃うに至っていない。ゆえに，上之塚古墳の築造時期を限定するにはなお多少問題が残らざるをえないのであるが，仮に埴輪の転換が越前と同様であれば４世紀末ないし５世紀前半，若狭の古墳文化が北陸の他の地方より畿内色が濃厚であることを勘案し，畿内とほぼ並行して転換がなされたものとすれば，４世紀末ないし５世紀初頭と推論しうる。⑥

なお，若狭の初期大型墳について言及する場合，看過しがたい論に，丹後と若狭など隣接域の双方の大型前方後円墳の分布の補完状況から，丹後から若狭などへと勢威を有する大首長勢力の盛衰や推移があったと想定する説〔平良1983〕がある。今回，上之塚古墳が京都府竹野郡弥栄町黒部銚子山古墳(全長約100mの前方後円墳）とほぼ同規模で，かつ同じⅢ期の埴輪をそなえるとともに，後者の埴輪よりやや新しい様相を看取しうることが判明した。ゆえに，この見解が説得力を増す結果となった感がある。ただ，黒部銚子山古墳に後続するとみなす説〔佐藤1992〕の有力な京都府中郡峰山町湧田山１号墳が，２段築成の帆立貝形前方後円墳で，葺石や埴輪の存否こそ未だ不分明であるが，全長が上之塚古墳を凌駕する106m前後を測るので，⑦問題は依然として微妙であるといわざるをえない。

上之塚古墳と同じⅢ期の埴輪を有する大型古墳といえば，畿内で河内の大阪府藤井寺市仲津山古墳（仲津媛陵，全長約286mの前方後円墳)や，和泉の同府堺市百舌鳥 陵 山古墳（履中陵，全長約365mの前方後円墳)などの，大和王権の盟主墳の存在をまず指摘しうる。

また，若狭の近隣の畿内北方域においては，近江(湖東)の滋賀県栗太郡栗東町地山古墳（全長約89mの帆立貝形前方後円墳)〔栗東町1990〕や同県蒲生郡竜王町雨宮古墳（全長約82mの帆立貝形前方後円墳)〔丸山1987〕，越前の福井県坂井郡丸岡町六呂瀬山３号墳(全長約85mの前方後円墳)〔福井県1988〕や同県福井市免鳥町免鳥長山古墳（全長約88mの帆立貝形前方後円墳)，⑧能登の石川県鹿島郡鹿島町水白鍋山古墳（全長約67mの帆立貝形前方後円墳)〔谷内尾1982〕や同県羽咋市滝大塚古墳（全長約90mの帆立貝形前方後円墳)〔石川県1986〕などの，Ⅲ期の埴輪を有するそれぞれの地方では最大級の古墳の所在が判明している。

それら近江～能登地方の諸例は，いずれも大型古墳で埴輪をもつのみではなく，２段築成で葺石をも兼備しており，各地方ごとの歴代の盟主墳のうちの１基とみなされているが，各地において盟主墳よりやや規模の小さい古墳に類例の多い墳形である帆立貝形前方後円墳の存在が目立っている。つまり，丹後をも含むが，当該期の北陸道域各地の盟主墳の墳形が，前方後円墳から帆立貝形前方後円墳に変化しているか，ないしは前代と同じく前方後円墳であるけれども規模がより縮小化しているなど，特徴的な様相を有している。古墳の造営が首長権力の直接的表象であるならば，在地の大首長の勢力の衰微とも表現しうる現象が顕著なことである。そうした状況下における，３段築成で周濠などをも完備した上之塚古墳の突発的ともいいうる出

現であるから，その背景は自ずから重要な意義を有するものと推量しうる。もちろん，この時期の北陸では最大の古墳にほかならない。

付記　本報告は，調査指導を得た方や畠中・永江などとの討議をもとに中司が執筆した。ゆえに，誤謬の箇所が存在するならば，文責は中司に帰すことになる。

最後になったが，調査にご配慮戴いた土地所有者各位や，降雪と湧水による泥濘の中での発掘作業に奉仕的にご協力戴いた学生諸氏，その他指導を得た方や地元関係者など，多くの方々のご助力に厚く謝意を表したい。

注

① もっとも，石部説には小異があって，城山古墳が最も先行するとみることでは一致するけれども，継起する古墳を上之塚古墳→中塚古墳と編年し，かつ上之塚古墳を4世紀末ないし5世紀初頭の築造と推定している。

② 管見の限りでは，上之塚古墳を除けば，山梨県を含めた中部地方（東海・北陸）における確実な3段築成の前方後円墳は，愛知県名古屋市断夫山古墳（全長約151m），山梨県東八代郡中道町大丸山古墳（全長約116m，ただし前方部は2段築成で後円部のみ3段築成）の2基のみにとどまる。ちなみに，大丸山古墳の全長については2，3の既往の異説があるが，上記の数値は田中新史・白井久美子・永沼律朗の3氏と中司による略測値である。

③ 多くの場合，墳丘基底下に位置する台状部分は「基壇部」と記述されている。しかし，呼称のさいには「壇」は「段」と誤解を生じかねないし，一部には墳丘自体の最下段部を「基段部」と表記する例も散見しうる。ゆえに，判別の明解な「基台部」を用いる。

④ 一昨年度の発掘で，西塚古墳でも同様な事例が確認されている〔福井県1992〕。また，永江寿夫氏によれば，本年の発掘で十善ノ森古墳でも同様な事例が判明している。

⑤ 本文中で記したように，今回の発掘では墳丘最下段の平坦面上に埴輪の配列は確認しえず，かつ，出土した土製埴輪の破片数は少量であった。それでも，最下段平坦面上における埴輪の存否については，発掘箇所がごく一部に過ぎないのであるから，確言しえない。つまり，埴輪の配置が粗い間隔でなされている蓋然性も否定しがたいので，なお予断を許さない。たとえば，大型古墳といえども，若狭に西接する丹後の京都府与謝郡岩滝町法王寺古墳（全長約74mの前方後円墳）においては，埴輪（Ⅱ期）の配置は約5～6m間隔であることが判明しており〔京都府1970〕，南東接する滋賀県蒲生郡蒲生町天乞山古墳（辺長約65mの方墳）においても，埴輪（Ⅲ期）の出土量が少ないので，粗い間隔で配置されたものと推定されている〔蒲生町1993〕。

⑥ 須恵器編年のＴＫ73型式期を，5世紀初頭に比定する立場で記述している。

⑦ 湧田山1号墳の全長に関しては，既往の報告値の100m〔京都府1988〕とは異なっているが，墳丘測量図と現地における略測値とを照合した結果，あらたに算出した数値である。

⑧ 福井市史編纂室が墳丘測量を実施済みであり，数値は同室の岩田武志氏の教示による。

参考文献

石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』1986年。

石部正志「若狭の主要古墳と膳氏」（『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ，1987年）。

入江文敏「若狭」（『季刊 考古学』第10号，1985年）。

入江文敏「上之塚古墳」（『福井県史』資料編13 考古，1986年）。

入江文敏「若狭」（『前方後円墳集成』中部編，1992年）。
上田三平『若狭及び越前に於ける古代遺跡』福井県史蹟勝地調査報告第１冊，1920年。
上中町教育委員会『向山古墳群第２次調査現地説明会資料』1988年。
上中町教育委員会『日笠地区圃場整備事業に伴う発掘調査報告』1991年。
川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第２号，1978年）。
蒲生町教育委員会『天乞山古墳発掘調査現地説明会』1993年。
京都府教育委員会「法王寺・岩滝丸山両古墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1970年）。
京都府教育委員会『京都府の文化財』第６集，1988年。
佐藤晃一「丹後」（『前方後円墳集成』近畿編，1992年）。
斎藤　優『若狭上中町の古墳』1970年。
田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』1966年。
平良泰久「国家形成期の日本海」（『歴史公論』88号，1983年）。
中司照世「古墳時代」（『発掘が語る日本史』第３巻 東海・北陸編，新人物往来社，1986年）。
中司照世「北陸」（『古墳時代の研究』11（地域の古墳Ⅱ　東日本），1990年）。
中司照世「北陸」（『古墳時代の研究』９（古墳Ⅲ　埴輪），1992年）。
中司照世「日本海中部の古墳文化」（新版『古代の日本』７（中部），角川書店，1993年）。
福井県『福井県史』資料編13（考古），1986年。
福井県教育委員会『六呂瀬山古墳群』1988年。
福井県立若狭歴史民俗資料館『特別展 躍動する若狭の王者たち』1991年。
福井県立若狭歴史民俗資料館「西塚古墳」（『第７回発掘調査報告会』1992年）。
福井県立若狭歴史民俗資料館「若狭地方の新発見の前方後円墳」（『若狭歴民だより』創刊号，1992年）。
福井県立若狭歴史民俗資料館『平成４年度 若狭地域における発掘調査の成果』平成４年度郷土史講座資料，1993年。
古川　登「遠敷郡上中町大鳥羽城山古墳について」（『若越郷土研究』25-1，1980年）。
古川　登「若狭・城山古墳の再検討」（『福井考古学会会誌』第５号，1987年）。
丸山竜平「原始・古代の竜王町」（『竜王町史』上巻，1987年）。
谷内尾晋司「水白鍋山古墳の調査」（『鹿島町史』資料編 上巻，1982年）。
栗東町教育委員会『岡遺跡地山古墳発掘調査現地説明会資料』1990年。
鹿西町教育委員会『雨の宮古墳群』1993年。

編集後記　今度の発掘により，以前古墳時代研究者数人の踏査時に採集され，須恵質の埴輪片かと思える品に依拠した上之塚古墳の推定時期を，訂正せざるをえなくなった。必然的に従来の若狭の大首長墓の変遷観も修正の必要性が生じる。学問的慎重さのなお不十分であったことを自戒し，今後の一連の調査でより正確な事実の究明に務めたいと思う。（N）

若狭歴民だより　第３号
発行所　福井県立若狭歴史民俗資料館
〒917-02　小浜市遠敷（おにゅう）２丁目104番
TEL　0770－56－0525
FAX　0770－56－0837
発行日　平成５年７月15日